

日本民俗學界の動向

平山敏治郎

近代日本の學術は大學を溫床として育て上げられた。殊に人文諸學の發達に關しては官立大學の研究室の果した役割は大きかつた。

數十年來の目まぐるしい社會生活の變化をよそに、所謂象牙の塔は幾多の學問と學者とを濫く保護していた。その反面に民間の上には、個人の手によつても團體の力によつても、同じ學問の芽は伸びるどころか、遂には發芽せずに終ることさえあつたのである。これは明治以來の日本文化形成の一形態であつた。歐米近代の文化を受容するに際して、政府機關が移植育成の指導と統制とに當つたのは後進諸國の追隨模倣の常態であつて、わが國もその例に洩れなかつたのである。學問の世界に於いてもこの方式の外に立つものではなかつたから、帝國大學の講座が學問分野を

確立し、その典據となつたのはその限りに於いては毫も不思議ではなかつたといえよう。

かゝる傾向に對する批判は別の機會に讓つて、この事實を常態と考える時、若い歴史科學の民俗學が成長して來たところには自ら別途の歩みが認められる。郷土研究の提唱された時分から數えると既に半世紀にも垂んとするこの分科の履歴のうちに、これも亦ヨーロッパの學者たちに負うところが大きかつた點は他の歴史諸學と變るものではなかつたが、一筋に在野の同好者の間に培養されて、大學の講座、研究室には殆ど迎え入れられることがなかつた。一に學問の對象が日常平俗な生活文化にかけられていたために、その體系理論の不充分であつたことと相俟つてこの不運を招いたともいえるが、一方には歴史學

に關する傳統的な力が作用していたことも否めなかつた。さうして學歴が學者の専門的權威を飾るような傾向があつたので、久しく素人好事の閑事業の如くに見做されていた。

かような回顧を今更の様に試るのは、待遇の不當であつた當時の非を鳴らそうとするのでは決してない。むしろ現状に鑑みて自ずと盛り上る學問的熱情と努力とが民俗學降昌の基礎を固めることになつた事實を想うばかりである。民俗もしくは民間傳承への關心が同じ國民への愛情と、ひいては人間愛の精神とに概して、官府の溫室をからずともその開花結實を見るに至つたことをいうばかりである。現在では漸く少數ながらも各地大學の講壇にも受け入れられ、殊に普通教育の社會科にもその成果は重要な部分を占めるまでに認められているのみならず一方には東京に民俗學研究所が設けられ、民俗學會は全國各地の諸學會と提携して活動する態勢を整えた。他の歴史諸學に比べれば、なお若さから生ずる未成熟の恐れなしとはいえないが、それだけに又活潑な動きも看取され、同學相倚つて自ら學苑に一群落をなしつつあることは、戦後

數年の歴史學界の動向を見て首肯されよう。この前途の希望に滿ちた學問の將來に期待して、本誌三十二卷一號に紹介された以後の状況を瞥見してみる。

○ 民俗學研究所は從來の郷土生活研究所（昭和九年結成、木曜會同人により組織）の發展形態とも見られる。昭和二十二年三月柳田國男氏の書齋を中心に設立され、事實上同氏の指導の下に發足したが、翌年四月には財團法人として獨立の態勢をとつた。柳田氏は日本民俗學の創始者の一人で、その發展は常に氏の活動によるものであつたことは何人も承認するところであるが、その多年蒐藏の圖書並びに史料は悉く研究所に移讓され、本所を名實共にわが國第一の民俗學研究の機關として重からしめている。現在國內に二百餘人の同人（研究員並びに維持員）を擁しているが、その運営には長と稱する位置を立てず、五名の理事（大藤時彦、堀一郎、直江廣治、牧田茂、今野回輔の諸氏）と九名の代議員（石田英一郎、大岡知篤三、瀬川清子、關敬吾、萩原龍夫、橋浦泰雄、最上孝敬、柳田國男、和

歌森太郎の諸氏）とを選出して合議決定によつているのも注意されるところである。

研究所の事業が民俗學の確立と發展とを期するためのあらゆる部門に亘つてゐることは勿論であるが、就中研究者の育成、指導、援助には特に力を注いでゐるのは、大學に於けるこの方面の研究の未發達の現状を補うものである。現に諸府縣よりの委託研究生の來所は尠くない。發足以來日なお淺いが重要な業績を挙げると、先づ刊行圖書には「民俗學新講」（二十二年十月）、「民俗學の話」（二十四

年六月）等の啓蒙書を初め「日本民俗誌叢書」四冊（第一期計画は二十四冊の豫定）、「社會科叢書」三冊（全十三冊の豫定）等がある。二十四年四月に公刊された「海村生活の研究」は先に出た「山村生活の研究」（十二年）に次ぐ大著で、戰爭に妨げられたといふ全國三十ヶ所にも及ぶ沿海村落の傳承文化が衣食住、生死冠婚、漁撈慣行、禁忌信仰など二十五項目に亘つて調査整理された。今後の研究の基礎となる事業の報告である。又民俗語彙の分類編纂も進み、既刊の十一種の外に戦後には「農村語彙」の増補版二冊と

「兒童語彙」上卷（二十四年一月）とが出、なお「交通語彙」・「食制語彙」等も上梓を待つてゐる。これに續いて「民俗學辭典」の編纂も二十五年度事業として企画され、既に校了したと聞いているから本號に先立つて現れよう。何れも大きな推進力として期待される。最後に研究所の紀要「民俗學研究」第一輯（二十五年六月）が世に問われたのも躍進の第一歩を印するものと歓迎された。この外に民俗學教本の作成も所員の間に着手されてゐる。

又月例の定期研究會は二十五年末までに五十六回を數え、民俗學會の談話會（木曜會以來二百二十九回を重ね）と共に研究發表、調査報告の機關となつてゐる。それらの記録は雜誌「民間傳承」に研究所會報として毎月附載されている。公開の會合ではないが同學の人に廣く列席の便宜があるようである。別に女性民俗學研究會も同所で月一回の會合をもつてゐる。このグループには「女の本」（二十一年九月）の勞作がある。

なほこの他には澁澤敏三氏の主宰した常民文化研究所（舊稱アチック・ミュージアム）

がある。戦前大規模の調査團を各地に送り、且つ彙報、ノート各數十冊を出版した業績は人のよく記憶するところである。最近水産廳資料整備委員會と協力して再發見し、漁村史料の蒐集と整理とに逞しい活動を始めている

次に民俗學會、これも民間傳承の會（昭和十年創立）の發展的解消によつて再組織された學會で、二十四年四月に改編されたが、主體は傳統的に柳田國男氏の學統をひいている。初め柳田氏を會長に推したが、同氏は持論として任期一年の會長交替を希望して、そのため現在では改めて五名の理事（柳田、大藤、大間知、堀、和歌森の諸氏）と若干名の委員とによつて經營され、外に顧問、監事と全國各地から七十余名の評議員が選ばれて参加している。民俗學研究所と表裏一體の構成であることはいふまでもない。

この會の活動の主力は月刊の機關誌「民間傳承」の發行にある。二十五年度には十四卷を重ね、戦後いちはやく復刊した逞しさは、文字通り中央誌の内容と共に賞識に値する。論說・史料等については項を改めて述べるが、近年の編輯から注目されるのは社會科教

育に對する審與と民俗學に於ける問題解説とがある。前者は二十三年度から翌年にかけて殆ど毎號頁を割き、社會生活の理解に傳承文化の與る意義を多方面から解明した。後者については十四卷の各號に以下の諸項に關して、問題の意義、研究狀況、今後の課題を解説している。即ち「大正月をめぐる諸問題」「千葉徳爾氏、「家と同族」萩原龍夫氏、「傳説」關敬吾氏、「田植前後の行事」大藤時彦氏、「村落社會」牧田茂氏、「益行事」萩原龍夫氏、「漁村民俗」梅田勝徳氏、「産育」大藤ゆき氏「祭」和歌森太郎氏、「婦人の勞働」瀬川清子氏、「昔話」直江廣治氏、「婚姻」大間知篤三氏等で、これらは第十五卷にも繼續されるはずである。

柳田氏の古稀誌を記念した論文集は「日本民俗學のために」と題し、折口信夫博士を代表とする編輯委員會によつて全二十四冊のうち第九冊までを世に送つた。こゝには民俗學のみならず親縁諸學からも多くの論考が寄せられている。倅觀と稱すべきであらう。

民俗學會の事業の一つに二十四年から始められた年次大會がある。既に二回を重ね、毎

會全國から参加する同學の研究發表と講演とがあり（その内容は「民間傳承」十三卷十一・十二號、十四卷十二號、十五卷一號に掲載）、會員相互の聯絡協議機關をなしている。會場は東京に設けられたが、將來は各地に巡回されることが望まれる。又二十二年の春には言語學會、人類學會、考古學會、民族學協會、社會學會、等の關係諸學會と連繫して聯合大會を開き、翌年には地理學會、宗教學會を加えた學會聯合の活動に参加協力している。

更に言及しなければならないのは地方民俗學研究團體との連絡である。各地には夥しい學會結成が見られ、これらは何れも独自の行動をとつていたために、早くから連絡の必要が叫ばれていた。現在民俗學會と提携してゐる會は、北海道郷土研究會（札幌市）、津輕民俗の會（弘前市、季刊「津輕民俗」）、八戸郷土研究會（八戸市「いたどり」）、仙台民俗の會（仙台市）、磐城民俗研究會（福島縣中村町）、羽前民俗學會（山形市）、高志社（新潟市、月刊「高志路」）、加能民俗の會（金澤市、月刊「加能民俗」）、福井民俗の會（福井市、月刊「若越民俗」）、上毛民俗の會（群馬

縣沼田町、月刊「上毛民俗」、山村民俗の會（東京都、「あしなかな」、山梨郷土研究會（甲府市、月刊「郷土研究」、大和民俗學會（奈良縣）、近畿民俗學會（大阪市、季刊「近畿民俗」、民俗學會兵庫支部（西宮市、「民間傳承兵庫篇」、岡山民俗學會（岡山市、「岡山民俗」、鳥取民俗研究會（鳥取市）、出雲民俗の會（出雲市、「出雲民俗」、島根民俗の會（島根縣邑智郡市山村、「島根民俗」、讃岐民俗研究會（香川県多度津町、「讃岐民俗」、阿波民俗の會（徳島縣小松島町、「阿波民俗」、大分民俗學會（大分市）、豊後郷土研究會（長崎縣武生水町、「村落生活の研究」、熊本民俗學會（熊本市、「みんぞく」、鹿児島民俗學會（鹿児島市、「鹿児島民俗」）等がある。

何れも民間傳承誌上に活動情況が報ぜられてゐるが、地方相互の協力は充分とはいえない。

○

研究史料の蒐集は學問の性質から現在の村落生活について傳承を採訪調査することに重點が置かれ、文庫作業は閑却されている傾きがある。史料集成が未だ充實したとはいえない段階にあるために、研究活動の過半は史料

採集に費されて「民間傳承」誌もこれに誌面の多くを割いているが、特に地方在住者にはその傾向が強く見られる。従つて曾つては報告者が即ち民俗學者を以つて任じた時もあるが、この偏向は漸く是正されつゝあることは地方發行の諸誌の動向に照しても認められる。

久しく旅行が困難であつたために大規模の調査は中絶されていたが最近に至つて二三の計画が實施された。先づ民俗學研究所の隼島調査がある。戦後社會の動態を明かにする點からもこの調査は現下の要請に應えるものとして、文部省科學試驗研究費の補助を得て、二十五年から三ヶ年の繼續事業は始まつた。共通の調査項目により約一ヶ月の滞在を目標に、第一年度に着手されたのは宮城縣牡鹿郡江ノ島、新潟縣岩船郡粟島、石川縣鹿島郡能登島、岡山縣小田郡白石島、長崎縣南松浦郡樺島、大分縣東國東郡娘島の諸島である。

この結果は先に行われた所謂山村、海村の二調査と併せ考へる時、大きな期待が寄せられる。これと平行して八學會聯合會も二十五年夏に對島の綜合調査に多數の學者を送つてゐる。民俗學會からは「神事の研究」・「女性の地位に關する研究」及び「生産と勞働慣行に關する研究」の三班をもつて參加協力した。なおこの一行の言語、社會、民族、宗教の諸學會擔當の課題にも民俗學の共同問題が多く含まれていた。何れも多大の收穫を得たことと想われる。この事業も二十六年度には心理學會を加えて九學會聯合の下に引續き實施される豫定で、この度は「擬制的親子の研究」・「主婦權の研究」・「家の經濟」及び「對馬と内地との靈地の比較研究」等が民俗學會の擔當となつてゐる。

その他管見に入つたところでは、東京文理科學大學の民俗學研究團は二十四年八月に種子島、二十五年十月には伊豆大島へ採訪旅行を試み、京都大學も二十五年十一月に長崎縣平戸島の綜合調査を行つたが、この一行のうちに民俗學班が加つたことは、他の諸班がそれぞれ研究室、教室毎に組織されたのに對して注目を浴びた。又近畿民俗學會は二十五年八月に滋賀縣高島郡、九月には兵庫縣六栗郡に共同調査を行つてゐる。何れも近く報告書の形式でそれらの成果が發表される豫定であ

る。個人的には宮本常一氏の水産資料について、萩原龍夫氏の近畿の祭祀組織についての調査も近來連続して行われているが、これらは多数の探訪者の一斑を数えたに過ぎない。他の夥しい活動に觸れ得ないのは遺憾である。

○

何といつても柳田國男氏の存在は偉大である。彙として光輝くこと半世紀、老來彌々健筆を揮い、常に學界の先頭に進まれるのは慶賀の至りである。戦後に發表された著書は前に記した「先祖の話」等約十冊に次いで、「氏神と氏子・新國學談第三」（二十二年十一月）「西は何方」（二十三年六月）、「村のすがた」（二十三年七月）、「婚姻の話」（二十三年八月）、「十三塚考」（二十三年八月）、「北小浦民俗誌」（二十四年四月）、「標準語と方言」（二十四年五月）、「祭のはなし」（二十四年七月）、「母の手毬歌」（二十四年十二月）、「方言と昔」（二十五年一月）等があり、「沖繩文化叢説」（二十二年十二月）、「海村生活の研究」等の編纂、「日本昔話名彙」・「日本傳説名彙」（放送協會編）の監修にも當つてい

る。その他「著作集」叢書も二十四年末には第十冊の刊行が企てられ、多くは既刊の再録であるが、中には「北國紀行」（第六冊）、「老讀書歷」（第九冊）の新輯も含まれている。再刊重版の書物に至つては一々擧げない。これら多方面に亘る業績はこの學問の始創の名に背かない。わが國の民俗學の領域が外國に比べて極めて廣汎であるのは、民族文化の地盤に概するとよるが、一に氏によつて開拓されたことを想えば足る。雜誌に寄せた論考の數も夥しくて枚舉に遑ないが「民間傳承」についてみると、「土糰團子の問題」（十二ノ八・九）、「狐塚のこと」（十二ノ十一・十二）、「七島正月の問題」（十三ノ一）、「田の神の祭り方」（十三ノ三・四・五）、「小豆を食べる日」（十三ノ九）、「年神考」（十四ノ一）等は一聯の民俗についての探求といえる。こゝに取扱われた田の神祭りについての研究は新國學談の第四冊に豫定されていた。最近の「田

社考大要」（十四ノ十一・十二未完）もこれに續くものであるが、先に出た「先祖の話」にも脈絡をひく研究であるだけにその完成は望まれる。わが國民の神觀念に關する分析は國學

者流の外に十九世紀以來の歐米宗教學說に基く論説があるが、傳承の實態を衝き、文献の再檢討を経た柳田氏の方法による提示には聴くべきところが多い。又「垣内の話」（十二ノ八・九）はカイトが地名その他として全國に多様な形態を留めている事實につき、その實態を究めることによつて、會つてこれの開立が農村の成立生長を促していたことを明めようとするものであつた。これに對して新に各地の實情が連りに報告されている。社會經濟史家の手に委ねられてゐた莊園村落の研究に

これらが有力な寄與となるべきことはいふまでもない。相互の提携協力が切に期待される。垣内と共に氏の刺戟で活潑になつたのは祖先祭祀の問題であり、これにも多くの論考、資料が寄せられた。「社會科のこと」（十二ノ一）、「社會科教育と民間傳承」（十二ノ七）、「民俗學研究所の事業について」（十二ノ七）及び「日本を知るために」（十三ノ十一）等は同じ誌上に掲げられた論説である。説こうとする方向は異なるが、何れも現實の社會生活とこの學問との深い關係を明かにする熱情が涵み出た文章といえる。柳田氏のこうした

業績に對して二十四年二月には A・A・A (American Anthropological Association) は名譽會員に推薦して敬意を表した。氏については述べればなほ多く觸れなければならず、以上は決してその本領を盡したとはいへない、が、長くなるので筆を止める。

柳田氏が「民間傳承論」・「郷土生活の研究法」乃至は「日本民俗學入門」以後の體系を示されることは等しく待たれていたが、この期待は民俗學研究所の所員諸氏によつて満される日が近づいている。その第一は和歌森太郎氏の筆になる「民俗學の方法について」(民間傳承十三ノ四)に問われた。いふまでもなくこれは先に民俗學の體系化を目指して世に問うた「日本民俗學概説」を一步進めたものである。研究所の教本作成のための研究會に發表された勞作であるだけに小篇ながら注目に値する。氏は民俗學の研究對象を民間傳承としての民俗に置き、民俗のもつ歴史的性格、歴史的意味を把握することに焦點を合せようとする。これは併しながら民俗の歴史を求めることではないという。更に歴史學との關聯に於いて兩者の基本的相違と相互關係と

にも觸れ、歴史はデイトとしての「時」を目標に求められるが、民俗學にはこれは意味をもたぬ。むしろ傳承される「場所」が問題となる。「地方差は即ち時代差を示す」といふ周圍論的認識を基準にすべきものであるといひ、歴史は今ある事實でなしに、今認められるところの過去の事實を語る文獻記録を用いねばならぬと規定區別する一方、兩者の成果の相互に密接に關係しあうことも指摘した。これについて直ちに反響があつたのは事が學問の本質に關するだけに當然であつた。關敬吾氏の「民俗學の方法の問題」(同十三ノ六・七)、山口麻太郎氏の「民間傳承の地域性」(同十三ノ十)、平山敏治郎の「歴史學と民俗學と」(近畿民俗二號)などはこれである。關氏は和歌森氏が歴史的な性格、意味を探索すると述べたのに對して現實の問題との關係を強調し、且つドイツ民俗學の諸説を楯にして研究方法には歴史的、社會的、地理的、心理的など諸方法が可能であることを力説された。兩氏共に民俗學を獨立科學と認める立場を執つているから、この場合民俗學の方法とは何かを解明されるのが先決を要する問題であら

う。これは單に言葉の上の問題ではない。主體的な内容に即するものの謂いである。次ぎに山口氏は「ある村人の民俗」ではなしに「日本人の民俗」を對象とするという和歌森氏の言葉によつて、地域性を重要視する立場を論じ、「地方差即時代差」という前提の解釋に疑義を呈した。又平山は和歌森氏の見解を身近に感じつゝも、氏の民俗學の對象は「民俗の歴史的な性格と意味とであつて、民俗の歴史ではない」と説き、「歴史學」と「民俗學」とを並列して論ずる點に對して、畢竟歴史科學の歴史のうちに新に成立した諸分科(民俗學考古學その他)を古く傳統ある正統的歴史(個性的な創造的な文化を對象とする)と名稱の上で區別して、古來の形態のみを「歴史」と稱するために生じた混亂を指摘した。その立場は歴史學は類概念で、正統的歴史學も考古學も民俗學もすべて種概念として理解されるべきであるとする。その見解は第一回年會に報告した「取越正月——文獻と傳承」(十三ノ十一)に於いて補足された。民俗學の對象とする傳承文化は或種の史料の形態に限つて求められるのではない。即ち「文獻」と「傳承」

とにより、「歴史」と「民俗」とを區別するのではなく、如何なる史料形態に於いて、あるりとも、個性的文化と傳承的文化とがそれぞれ正統歴史學と民俗學とに分ち控わるべきものであると提示した。これらの諸説は自ら立脚するところの相違に基いていよりも、今後の共同課題として學問の性格を確立する道を開く端緒とならう。

和歌森氏は近年最も活躍される一人で、戰後公にした數種の著書に加えて、近く「中世協同體の研究」(二十五年八月)を出されたのは氏にとつて記念すべき業績となつた。これは先の「國史に於ける協同體の研究」上巻に繼ぎ、「氏人より氏子へ」・「神主と頭屋」・「協同體の神道的生活」その他數篇の力作を合んでゐる。何れも所謂中世期の史料に即して論考すること明快である。たゞ村々の祭祀組織を分析した十四の類型の何れが中世様式(歴史的性格と意味とに於いて)と認定されるかに關してはなほ問題が残されているかの感があつた。併しながら氏に於いて所謂歴史と民俗學との融合が着々と進行しつゝあるのを見るのは興味深い。なお「村の傳承的社會

倫理」(民俗學研究一輯)・「カマド神について」(八學會年報二輯)その他の勞作がある。

柳田氏を扶けて木曜會以來の活動を續けている人々のうち、大間知篤三氏は婚姻と隱居との問題を擧げて、「利島のモリとオヤコ」(民間傳承十四ノ一)、「寢宿婚の一問題」(同十四ノ三)、「家の類型」(同十四ノ十二)、「隱居家族制について」(八學會年報二輯)、「伊豆利島の足入れ婚」(民族學研究十四ノ三)、「八丈島の女性」(同十五ノ一)等を發表している。特に民俗學研究第一輯の卷頭を飾る、「足入れ婚と其の周邊」は嫁入婚と嫁入婚との中間に足入れ婚様式を認め、各地の習俗について婚舎の所在、婚姻成立祝の催される場所及びその性格の二規準による分析を試みた雄篇である。婚姻の習俗に關して有賀喜左衛門氏の「日本婚姻史論」(二十三年十一月)と共に見るべきものである。大藤時彦氏は研究所の經營に専念しているが、「犬飼はずなど」(民間傳承十三ノ十二)その他がある。最も古い家畜の一である犬に關する民俗を多角的に摘釋した。關敬吾氏は昔話の分野に於いて「日本昔話集成」全四冊の編著を成し、既に

その第一部動物昔話(二十五年 月)の大冊を出した。これも完成が待たれる。瀬川清子氏は女性研究者の指導的位置を占め、「産屋について」(日本民俗學のために九輯)、「成女式について」(八學會年報一輯)、「あまの浦」(民間傳承十三ノ七)、「女性と祭り」(同十四ノ七)等に女性の生活を取扱い論考がある。「前代生活の論理について」(思想の科學一ノ十二)、「常民の哲學」(同二ノ二)等に新分野を拓いて注目された倉田一郎氏の死は惜しいが、その遺著の一部は「經濟と民間傳承」(二十三年三月)となつて刊行された。又堀一郎氏は宗教史的な勞作を續け、「民間傳承と日本文化」(人文三ノ一)をはじめ、年の暮の來訪者」(解釋と鑑賞一五一)、「十三塚について」(八學會年報一輯)、「初春のかひ人」(民間傳承十四ノ二)、「死者及び死靈崇拜の殘留と分化」(民俗學研究一輯)等がある。後者は祖靈信仰の研究に大きなブラネである。

近時關心を蒐めた二三の問題について見ると、先づ祖先信仰をめぐる柳田氏、堀氏に次いで井上頼壽氏「氏神について」(日本民俗

俗學のために四輯)、岩崎敏夫氏「氏と氏神」(同)・「氏神まつり」(民俗學研究一輯)、服部治則氏「甲州の同族神」(民間傳承十三ノ十二)、竹田聽洲氏「株の祭」(同十四ノ二)宮本常一氏「周防大島の荒神」(同十四ノ七)、平山「神棚と佛壇」(史林三一ノ一)をはじめ若狭のダイジヨコ、ニッソの村等の好資料も寄せられ、「民間傳承」十四卷十一號には地の神の報告が輯められた。カイトについても同誌十四卷十號は特輯し、直江廣治氏「カド小考」その他數篇がある。なほ十三卷(八・十・十一)にも史料が載つた。兩墓制、耳塞ぎ習俗は何れも「民間傳承」が取上げて展開した問題であるが、前者は十四卷四・五號に特輯し、又同じく十號、十一號にも報告がある。後者には大藤氏の「耳塞餅」(日本民俗學のために六輯)やその一般の形態を對象とする平山の「取越正月」がある。

その他西谷勝也氏「村の構成」(民間傳承十四ノ一)、最上孝敏氏「家の盛衰」(同十四ノ九)、石塚尊俊氏「田植組と田植方式」(同十三ノ六)、牛尾三千夫氏「さんばい祭について」(同十三ノ十一)、萩原龍夫氏「司祭者

をめぐる民俗」(八學會年報一輯)・「村の運営と祭祀組織」(民間傳承十四ノ十)田村馨氏「東北の講集團」(同十四ノ十二)、竹内利美氏「御前崎の漁祝と勞働組織」(同十三ノ七)、龜山慶一氏「牡鹿半島における漁撈組織と勞働力について」(同十四ノ十二)、櫻田勝徳氏「葦島の親方取り」(同十三ノ七)、西谷勝也氏「播磨家島の婿入婚」(同十四ノ十一)、千葉徳爾氏「農村經濟と民俗學」(同十三ノ一)・「タテザクとヨコザク」敵立農法の問題」(同十四ノ八)、渡邊澄夫氏「九州地方のヒカリについて」(同十四ノ六)、大藤時彦氏「漁民の禁忌」(八學會年報一輯)、竹田且氏「水神信仰に關する一考察」(同二輯)・「水神信仰と河童」(民間傳承十三ノ八)、非之口章次氏「狼弾きの竹」(同十三ノ十一)・「末期の水」(同十四ノ十)、丸山學氏「月の八日」(同十三ノ五)、土橋里木氏「こと八日と山の神」(同十四ノ六)、直江廣治氏「八月十五日夜考」(同十四ノ八)、平山敏治郎「八朔習俗」(歴史學一輯)等取上げるべき論考は多くあるが、その個々について紹介する紙幅のないのは残念である。

この間に出された單行本には既に擧げたものゝ外にも尠くないが、そのうち社會科教育に關係する内容の書物が特に目につく。研究所の社會科叢書は同所員共著による「社會科の諸問題」、牧田茂氏の「村落社會」及び和歌森、萩原兩氏の「年中行事」がある。萩原氏には別に「郷土の風習」の一冊がある。宮本常一氏には「石徹白民俗誌」(二十四年四月)の外に、「村の社會科」(二十二年十二月)・「村のコンミュニティスクール」(二十五年二月)・「ふるさと生活」(二十五年四月)等の好著を相次いで送り、竹内利美氏にも「小學生の社會調査」(二十三年十月)及び「レクリエーションと村の生活」(二十四年五月)等がある。何れも教育の實際に多年經驗を積んだ人々によつて書かれたので、民俗を教材に取上げてゆくには最もよい指導書となつてゐる。橋浦泰雄氏の「まつりと行事」(二十四年)も逸してはならない。文部省の迷信調査協議會による「日本の俗信」のうち、「迷信の實態」(二十四年九月)と次いで出た「俗信と迷信」とはこの方面の好資料を蒐めてゐる。地方的な刊行物には諏訪教育會編

「諏訪の年中行事」(二十四年)、郷九十九一氏「村の年中行事」(二十五年七月)、戸川文章氏「羽黒山伏と民間信仰」(二十五年九月)を初め数々あるようであるが、その殆どすべては管見の及ぶところではない。

雑誌「民族學研究」は創刊以來民俗學への協力を続けているが、石田英一郎氏を編輯陣に迎へてからその關係は一層密接になつてゐる。近頃の記事のうち特に注目を惹いたのは柳田國男、折口信夫兩氏の對談「日本人の神と靈魂の觀念そのほか」(十四ノ二)及び「民俗學から民族學へ」(十四ノ三)である。何れも石田氏の司會の下に行われ、これらの問題をめぐつて兩先達の思索の發展と學界の動向とを窺ふ貴重な文獻となつてゐるが、この對談に石田氏の果した役割は大きく、むしろ鼎談として讀むべきものであつた。殊に後者には民俗學の將來について多くの示唆が含まれてゐる。「民間傳承」にも「民俗學の過去と將來」座談會(十三ノ一・二)が載つてゐる。歴史科學として國史の立場から理解すべき性格をもつ一方に、民俗學のうちには世界史的な民族學的視野によつて把握さるべ

き性格があることは改めていふまでもない。文化史的なゼキン學派の民族學に造詣深い石田氏が民俗學と民族學との提携綜合に最も適任であることは衆目の見るところであらう。氏の「河童駒引考」(二十三年一月)は柳田氏の「河童駒引」(山島民譚集所收)傳説を發展させ、小さ子の傳承を取扱つた「一寸法師」(二十三年十一月)や沖繩文化の「月と不死」

(民族學研究十五ノ一)信仰等は比較民族學的研究の立場から書かれた勞作である。日本の民俗資料を考えるために新なる反省を促すところがあろう。新刊「民族學の基本問題」(二十五年五月)はこの方向からする好著である。

こゝで隣接諸學より興へられた民俗學への恩恵を少しく顧ると、大場譽雄氏「民俗學と考古學」(日本民俗學のために五輯)、小寺廉吉氏「民族學と人文地理學」(同七輯)、川島武宜氏「民俗學と法社會學」(民間傳承十三ノ二)棚瀬襄爾氏「死なない靈魂」(同十三ノ三)、藤原興一氏「民俗の學問とことばの學問」(同十三ノ十二)等がある。肥後和男氏をこゝに數えるのは聊か當を失する嫌いが

あるが、「生活に於ける年齡の表現」(同十三ノ六)、「民俗に於ける世界性と民族性の交錯」(同十四ノ四・五)等は氏の民俗學の育成に獻げられた熱情のなお強いことを語つてゐる。たゞ後者に於いて民俗の起源に關する見解には大藤氏の「民俗の主體性」(同十五ノ一)なる反響を呼んだことは尙新しい。「民族學研究」誌も岡正雄、八幡一郎、江上波夫の諸民と司會石田氏によつて「日本民族の文化の起源と系統」(十三ノ三)座談會を初め、「シャーマニズム研究」(十四ノ一)、「ルース・ベネディクト『菊と刀』の興へるもの」(十四ノ四)及び「沖繩研究特集」(十五ノ二)

等の特輯號を相次いで出した。「菊と刀」については柳田氏、和辻哲郎、有賀喜左衛門等數氏がそれぞれの見解を述べて、この書の價値を認めてゐる。沖繩特集には柳田氏「海神宮考」、折口氏「日琉語族論」、島袋源七氏「沖繩の民族と信仰」、比嘉春潮氏「沖繩の村芝組織」、大藤氏「日本民俗學と沖繩研究」等がある。先に出た「沖繩文化叢說」と共に日琉文化の親縁關係を明かにする點に重要な意義を擔つたものであらう。

最後にこれら多數の人々によつて築き上げられてゐる民俗學の方向に對して、批判的な聲も賑々揚げられてゐることも忘れてはならない。そのうちには無理解な非難や村撰な曲解があるのは取上げるまでもないが、「歴史學研究」が特輯した「歴史學と隣接科學」

(一四二號)に載つた古島敏雄氏の「民俗學と歴史學」の發言は充分傾聴に値するものであつた。氏は柳田氏が記録偏重の從來の歴史研究の批判に出發して、新しい實證的な歴史の建設に盡した努力を認めながら、その追隨者にまゝ見受けられる無反省な史料の取扱ひ方に對して、敢て「僻村の老嫗の氣まぐれな記憶を以て、眞實に替へるといふ誤りが、過去の史學の誤りを越えて大きく浮び上つてくることを、われわれは深く警戒せざるを得ないのである」(傍點筆者)と極言してまで強く警告してゐるのは、立場の相違や論旨を進めるための表現の適否は問はず、民俗學徒を以つて任ずる人々の猛省を促してやまぬものがある。古島氏は「新しい實證的な史學」の確立に献身する一人であり、「山村の構造」(二十四年 月)の編著者であることによつ

ても、この批判のよつて來る眞意を察すると雖でない。要する民俗學のよつて立とうとする「傳承」の取上げ方に關する方法の樹立は今後の民俗學にとつて重要な課題となつてゐるのである。(一九五一・一・二五)

銅鏃刺傷人骨新發見

昨年十一月京都大學平戸綜合調査團が現地調査を行つた際、同島獅子村根獅子に於て數體の既掘人骨を採集した。すでに一度掘りだされたものを、改めて海岸の砂中へ埋藏したため、遺跡の原狀は明かでなかつたが、相並んで土中に安置せられていたり、あるいは箱式棺の中から出たりして、埋葬骨であることはまちがひがない。すでにばら／＼になつた人骨と一緒に貝輪や彌生式土器片があつて、後者からほゞ年代が推定せられるのである。ところがこの人骨の復原調査を九大解剖學教室の金關丈夫博士に依頼してゐたところ、一頭蓋頂に銅鏃の尖端が突きさつたまゝ遺存していることが判明した。女性成人骨で右側頭頂骨前頭角部に長徑六・五ミリ、幅三ミリの菱形綠青色を呈した鏃端が約六ミリの長さ

骨壁内に陥入してゐるのである。非常に強い勢で射込まれたらしく、骨面が鋭く削られてをり、その後の増殖性反應が殆ど認められない點からすると受傷後あまり長くは生きてゐなかつたらしい。從來弓矢による骨損傷の例は石鏃によるものがあり、岡山縣粒江貝塚出土人骨の脊椎骨と愛知縣伊川津貝塚出土人骨の右尺骨にそれ／＼石鏃が刺つたまゝ残つてゐた。銅鏃例は今回が最初のものと思はれる。

これは彌生式時代銅鏃が實用されたことを示す有力な資料であるが、しかもその被傷者が女性であるところに甚だ興味をそゝられる。五島あたりの海賊が襲來してきて、あわてて濃の蔭にかくれて小さくなつてゐたのを見つければ、前方から射られたのか。或は戰鬥員として部落民の先頭に立つて進撃してゐたところを、樹上にかくれてゐた伏兵にうたれたか。いづれにしても當時の戰爭の悽慘さを物語つてゐる。わが國古代に女性が部族の呪巫的酋長として活躍したことは卑彌呼や神功皇后の史傳が教へるところであり、古代社會に於ける女性の社會的立場を暗示する資料にもなるであらうか。(樋口隆康)